

藤並の森

Vol.10

高知県立文学館



●越知町のコスモス畑（写真提供／徳山隆志氏）

リレー随筆⑩ 田岡嶺雲が愛児と初めて会った日 —— 西田 勝

嶺雲が蘇州の師範学堂で教習をしていた時代、冬休みを利用して保養に行つた小浜温泉の宿がどこだったのか、調べに行つた。一九〇六年一月一二日から三週間、そこに滞在していたのだが、宿の名前がはつきりしていなかつたからだ。二〇年前も訪ねたのだが、この間の地元での郷土研究の蓄積に期待したのだ。当時の温泉場風景を伝える写真をはじめ、やはり出掛けただけの収穫があった。宿はどうやら柳川屋（斎藤茂吉も来ている。現在は伊勢屋旅館に吸収されている）だったようだが、確証はない。柳川屋でも伊勢屋でもいいような気もするが、はつきりした方がいいに決まっている。

日時の方も、そういう問題が生ずる。嶺雲は文芸評論家では飯が食えず、岡山県津山の中学校の教師となるが、土地の芸妓と大恋愛、相手が受胎したので、結婚を決意するが、芸妓の

嶺雲が蘇州の師範学堂で教習をしていた時代、冬休みを利用して保養を行つた小浜温泉の宿がどこだったのか、調査を行つた。一九〇六年一月一二日から三週間、そこに滞在していたのだが、宿の名前がはつきりしていなかつたからだ。二〇年前も訪ねたのだが、この間の地元での郷土研究の蓄積に期待したのだ。当時の温泉場風景を伝える写真をはじめ、やはり出掛けただけの収穫があった。宿はどうやら柳川屋（斎藤茂吉も来ている。現在は伊勢屋旅館に吸収されている）だったようだが、確証はない。柳川屋でも伊勢屋でもいいような気もするが、はつきりした方がいいに決まっている。

日時の方も、そういう問題が生ずる。嶺雲は文芸評論家では飯が食えず、岡山県津山の中学校の教師となるが、土地の芸妓と大恋愛、相手が受胎したので、結婚を決意するが、芸妓の

田岡嶺雲の完全な全集を編むこと、そしてその詳細な伝記を書くことは半世紀來の宿願だが、全集の方は全八巻のうち三巻を出しただけで（何と配本が始まって今年で三一年目、三一年で三冊！）、伝記の方はまだ一行も書いていない有様。文字通り「日暮れで道遠し」の感あるこの頃だ。

評論や研究はとにかく、伝記となると、日時とか場所とか、細部をおろそかにすることができないくなる。つい先達でも長崎での平和集会に出た帰り、遠し」の感あるこの頃だ。

嶺雲が蘇州の師範学堂で教習をしていた時代、冬休みを利用して保養を行つた小浜温泉の宿がどこだったのか、調査を行つた。一九〇六年一月一二日から三週間、そこに滞在していたのだが、宿の名前がはつきりしていなかつたからだ。二〇年前も訪ねたのだが、この間の地元での郷土研究の蓄積に期待したのだ。当時の温泉場風景を伝える写真をはじめ、やはり出掛けただけの収穫があった。宿はどうやら柳川屋（斎藤茂吉も来ている。現在は伊勢屋旅館に吸収されている）だったようだが、確証はない。柳川屋でも伊勢屋でもいいような気もするが、はつきりした方がいいに決まっている。

日時の方も、そういう問題が生ずる。嶺雲は文芸評論家では飯が食えず、岡山県津山の中学校の教師となるが、土地の芸妓と大恋愛、相手が受胎したので、結婚を決意するが、芸妓の

田岡嶺雲の将来を考え、彼の子供（後の田岡良一・京大名誉教授）を宿したまま鉄道請負師の妻となってしまう。しかし、愛児を思う気持ちは日増しに強くなり、北清事変に記者として従軍する時、出発前夜、父としての切々たる感情を吐露した『哀れる吾兒』を遺書代わりに書き、『帝国文学』に投稿した。

思いつめた彼が津山の知人の家で愛児と初めて会った情景は、その自叙伝『数奇伝』に描き出されているが、その日は何年何月何日だったのか。それが、こちらの方は嶺雲が友人篠川臨風に宛てた一九〇一年三月四日消印の手紙が出てきて、はつきりしたのだ。

「前日曜、津山にしあり、陰に吾兒を見申候。予を見て半ばおそれ、半ば親しむの風いぢらしく覺申候。其母なるものにも其際一寸会ひ申候。十分許りにて相別れ申候へ共、親はなくとも子は育つ、予は撫然として感に禁へざるもの有之候」

会った日は三月一七日、良一は満三歳、嶺雲は三〇歳、息子の母は二十四歳だった。そして、その日は嶺雲が岡山県知事の教科書汚職事件を告発して逆に「官吏侮辱罪」で起訴された予審法廷の最中だった。

（文芸評論家）

◆次回企画展によせて◆

「土佐の反骨 田岡嶺雲展」

2000年10月21日(土)～平成12年12月3日(日)



田岡嶺雲 (1870~1912)

反骨の思想家、自伝の傑作『数寄伝』の著者、田岡嶺雲が、秋寂の雨の日光・大谷河畔の寓居で客死したのは、明治が大正と改元して、未だひと月ほどしかたっていない一九一二年（大正元）九月七日の未明であった。

その年は明治天皇の容態が悪化、その病状が連日紙面を尽くして報道されていた。そして七月三〇日の崩御となり、その後も大喪準備のことなど関連の記事が続いている。「田岡嶺雲氏重態」「嶺雲氏の臨終」の記事はそうした記事の狭間に縫つて掲げられた。

妻なく子なき「父子」の名乗りをせぬ運命の子はあつたが：）嶺雲の晩年の生活を支えたのは、それぞれ七歳上と五歳上の、長兄田岡典章と次兄木村久寿弥太の二人の兄である。日光町内の小西旅館に数日前から滞在し、病床の嶺雲を励まし、その最期を見届けた。

明治二十一年三月、嶺雲十七歳の春に

田岡家中興の祖、父享一を失つてからはこの両兄が嶺雲の父代わりであった。亡父の恩を『数寄伝』の中でもしばしば懷かしんでいるが、その兄弟もまた、互いにその道は異にしても強い絆で結ばれていた。神戸、長崎、大阪の兄たちの家は窮鳥嶺雲がしばしば疲れた羽を休ませ、そして再起する慰安の場所でもあった。

現・日光市匠町の淨光寺に親友白河鯉洋の書による「嶺雲處士埋骨之標」があり、墓碑の側面にはこの両兄が愛弟嶺雲を悼んで詠んだ左の句が刻まれていて感動を説く。

「舍弟嶺雲を悼みて

秋風に荼毘乃煙や嶺の雲 久寿弥太

この冬は弟独りに兄ひとり 典章

このたび、「田岡嶺雲展」準備の過程で

多くの方々のご協力を得たが、典章・久

寿弥太二兄の写真（典章氏は推測）を得たことも、嶺雲の新発見写真同様にうれしく有り難いことであった。次兄久寿弥

太氏の写真数葉が東京のご遺族から送られてきたとき、その若き日の氏の風貌に嶺雲を偲ばせるものがあり驚いたものである。

その久寿弥太氏の東大卒業が明治三十年とあるから入学は同二十年であったろうか。明治二十年は病癒えた嶺雲が初めて上京し水産伝習所に入った年であり同二十三年は嶺雲が東大漢文科選科に入学した年もある。思うにこの次兄久寿弥太氏もまた、若き嶺雲を奮發させるだ

けの魅力ある存在だったのだろう。

「嶺雲遺観」

との上蓋に刻字された、生前嶺雲が愛用した硯も展示紹介する。

「数寄伝」の原稿は、寝椅子の上に仰向けてになって巻紙に長ながらと書いた。

とは田中貢太郎の追憶録（初出は「中央公論」大正三年十二月号）の一節だが、

そのときも傍らにこの硯があつたのだろうか。

長兄田岡典章・寿子夫妻宛ての、何気ない時候の挨拶で始まる嶺雲の巻紙書簡は、兄夫妻の弟嶺雲の身を案ずる思いが逆に伝わってくるのである。不羈奔放、無鉄砲でそして病がちな弟を常に気遣つておられたようだ。

さて、文芸評論家、教師、新聞記者、雑誌編集者、漢学者、思想家と嶺雲はさまざまな顔を持つているが何を一番に推すか。嶺雲の取材で来高された山陽新聞の横田氏は「やはりジャーナリスト田岡嶺雲でしょう」と言わされた。万朝報、戸の新聞「いはらき」、岡山の「中國民報」ほか新聞記者・ジャーナリストとして活躍も確かに目覚ましいものがある。

岡山では教科書採択をめぐる汚職で知事を攻撃し官吏侮辱罪で厳寒の二ヶ月を岡山監獄に囚われた。号外に次ぐ号外で

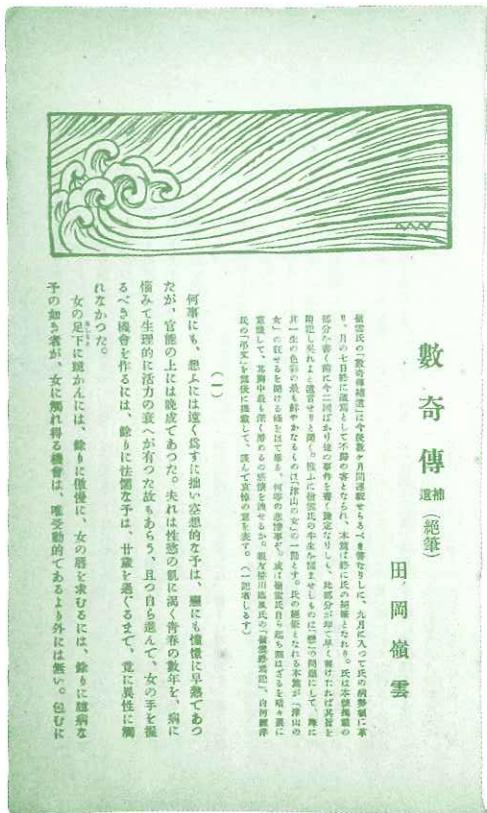
新聞社もまた戦場と化したと言われる日露戦争時も主筆として新聞報道の責に当たつた。今日、ほんの僅かしか当時の新聞



次兄 木村久寿弥太 (1865~1935)

が残されていないのは誠に惜しまれる。そんな中で「いはらき」時代を回顧した嶺雲の寄稿記事「十五年前の回顧」や、「中国民報」を去るとき岡山及び岡山の読者への惜別の思いを綴った「読者に告別す」の署名記事が残っていたことは、また彼の数奇の生涯を決定したとも言える青春の地「月見草のような女」大磯かつとの出会いと別れの苦汁を嘗めた、岡山県北の城下町津山の人々のご協力が得られたことも大きな励みとなつた。赴任先の津山中学に正岡子規の学友でもあつた大谷是空がいたこと、「月見草のような女」との出会いに、その是空が関わつたことも教えていただいた。嶺雲の数奇の生涯を決定したともいえる「津山の恋」。根が眞面目でヒューマニティーに富む嶺雲だからこそ「芸妓との恋」に人生の深奥を観、その後の思想を深化させ得たとみたい。

だが圧巻はなんといっても嶺雲の自筆原稿と書簡である。「国家主義と個人主義」そして「波のしぶき」らの毛筆原稿は百年の時を経て、「文章の力」を信じ、



「中央公論」大正元年10月号
「数奇伝補遺」(絶筆)を収載。

【主な展示資料】

- 嶺雲遺硯・舍兄木村半痴識
 - 田岡嶺雲自筆原稿（1900～1910頃）
「国家主義と個人主義」「波のしぶき」他
 - 田岡家資料（差出、貢物加治子取立牒）
 - 兄典章や友人宛ての嶺雲書簡
 - 嶺雲や兄たちの写真
 - 発禁で切断跡ののこる『壺中觀』
 - 津山中に勤時の未払い報酬の支払いを求めたことを示す「明治32年
岡山県令達」
 - 嶺雲宛て小杉未醒書簡
 - 田岡良一氏旧蔵・嶺雲蔵書（一部）
 - ◆嶺雲ゆかりの地（日光・津山など）の写真や映像などもご紹介する予定です。

【關連行事】

◆国際シンポジウム

◆国際シンポジウム
テーマ「田岡嶺雲と現代」

11月11日(土)14時～17時、文学館ホールで開催。定員100名、申し込み順。

＜パネリスト＞

西田 勝氏(文芸評論家)、R·P·ロフタス氏(米)

吉ム・レイホ氏(ロシア科学アカデミー世界文

(早大教授) <司会> 高橋正氏(徳島文理大教授)

※参加ご希望

◆文学散步

12月1日(金)9時半~12時

高知市旭の田

幡宮など。約5キロメートルほどを歩きます。

に旭町3丁目の木村会館東庭に集合。定員20名。※参加ご希望の方は、往

復ハガキで11月15日までにお申し込
※いずれも〒住所・氏名・年齢・電話



田岡嶺雲の著作（共著・翻訳を含む）

「あたかもみなみと注がれた盆水を捧
げ持つが如き散髪の態度を以て紙このぞ

十一年六月十三日のことである。脊髄癆が進行、この年正月過ぎから嶺雲は歩行

本も感動を誘うだろう。

「未だ死せず、但し足痺して歩する能はず！」のハガキを当時土佐中村に帰省していた幸徳秋水に書いたのは、明治四

いが籠もる。
今日、嶺雲資料の過半は県内では得ら
れず、また明治期の諸雑誌 新聞の閲覧

するからと後押しして下さった西田勝先生（「田岡嶺雲全集」編纂者）のご協力は言うまでもない。

（放菴）や白河鯉洋や大町桂月、そして嶺雲の精神を継承した田中貢太郎や甥田岡典夫、そして感化を受けた有本芳水や尾崎士郎らのことも可能な限り紹介できればと思っている。

「土佐の反骨 田岡嶺雲展」へも、ぜひ足をお運びいただきたい。

学芸員メモ

2000年初夏企画

「宮尾登美子」展 「一絃の琴」…そして「櫂」「春燈」「朱夏」～映像化された作品群～を終えて

文学館では、春夏秋冬、年4回の企画展や特別展を開催しています。この時期、本年度の企画展の日程や内容は、すでに確定していましたが、これに合わせて日程を振り動かし、準備や展示は短期間でしたが、「宮尾登美子展」を初夏企画展として取り込むことにいたしました。経緯を申し上げると、企画展開催のきっかけとなつたのは、今年3月～7日まで、NHKがドラマ「一絃の琴」の放映を決定。それを受けでNHKがドラマ「一絃の琴」の企画展を当館で開催するという話が持ち上がったことからでした。

「一絃の琴」…そして「櫂」「春燈」「朱夏」「映像化された作品群」を終えて、はや二ヶ月が過ぎようとしています。

今回の企画展は、本年度に入つてからあわただしく開催が決定された特別企画展であり、変更に変更を重ね、最終的に、は、当初の企画とはずいぶん違った展示内容となっていました。



企画室展示室入り口風景

しかし、この企画は、内容的にも予算的にも、また館運営上においても問題点が多く、実現されませんでした。そこで、オリジナルの企画へと変更されたわけです。

とにかく決定を急がれる事柄に次々と
ぶつかりながらも、時事企画展の要素を
含む「宮尾登美子」展は、6月開催に向
け、準備が進められたのでした。

さんと橋本大二郎知事の対談、「一絃の琴」と土佐の女性たちを語る夕べ(開催の日を迎えた)。この日は、五百名を超える多くのファンの熱気で、会場は盛り上がり、まことに。

しかし、この時点でも、宮尾先生からは、資料が分散している等を理由に「この時期の開催は無理」とのお言葉をいただいておりました。けれども、館としては、もう後に引くことは出来ない状態にまで来ていましたので、この日「宮尾登美子展を6月から開催する予定」と会場の皆様にご案内申し上げた理由です。

多数のご著書ゆえに、資料特に草稿や完成稿の所在が不明というケースが多く、短期間での資料収集の難しさを痛感しながらも、先生からのアドバイスをもとに、資料収集をおこなつてまいりました。

そんな中、作品「続の琴」は、「絶琴」の歴史など関連資料が身近にあり、作品への導入が比較的スムーズでした。このことがきっかけとなつて、企画展開催にむけ、拍車がかかりました。

ロビーでは、当時放映中のドラマ「二絃の琴」と現在週刊朝日に連載中の「宮尾本 平家物語」関連資料、青龍の巻（二）の生原稿とゲラ原稿、そして珍しい武者姿の宮尾さんの写真パネルなども展示しました。

週刊朝日には、この作品群に毎回違った題名がつけられ発表されていますが、当初宮尾先生は、「歓桜の歛簿」（らほ）として構想を練つておられたようで、毎回「歓桜の歛簿」と書かれた原稿が数点、借用した原稿の中に見られ、これらは、推敲の過程がよくわかる貴重な展示資料となりました。

「著名人との交流」では、吉行淳之介、佐多稻子、宇野千代、篠田一士、丹羽文雄、緒方拳、といった方々からの書簡をご紹介。「娘のようにかわいがってくださいました」という宇野千代さんからのお礼状や、四十年来の友人で画家の福富栄さんからのはげましのおたよりなど、文面からは、心温まる交友関係が偲ばれました。

また、豆本や特装本などは、著者の拘りが個々の作品に深みを持たせながら私

「愛藏品」としては、「きものがたり」で紹介されている宮尾先生愛藏の品々を中心にして展示。一点一点に、先生の思い出が込められており「著者を身近に感じることができました」というファンの声を多くいただきました。

会場内には『一絃の琴』のコーナー、自伝的作品群『綾子三部作』より『櫂』『春燈』『朱夏』のコーナー、「映像化作品群」としては特に『鬼龍院花子の生涯』『陽暉楼』『寒椿』『序の舞』『藏』などのコーナーを中心に取り上げました。

「宮尾木 平家物語」牛原稿

トラ』や高知新聞を始め全国八紙に順次掲載された『天涯の花』のコーナーは、資料借用に際し、画家の谷川泰弘、大畑



「宮尾文学のふるさと」コーナー

【宮尾文学のふるさと】のコーナーでは、文学散歩のイメージで先生のふるさとを皆様に訪ねていただこうと『櫻』『春燈』『朱夏』『仁淀川』といった作品の中

閲 覧 室 か ら



病中放浪

田岡
嶺雲
著

一八九五年、雑誌「青年文」の記者として文壇にデビューし、霸氣ある鋭い評論で当時の青年を魅了した二十四・五歳の若き田岡嶺雲の第一評論集『嶺雲搔史』（一八九九年刊）は二万部を超える當時のベストセラーになつたという。だが一九〇五年に世に送つた『壺中觀』は、発行と同時に発禁処分を受け、以後も次々と同様の憂き目を見ることとなる。

この『病中放浪』は、一九〇六年七月から一九〇九年十一月までに書いた文章のうち危険のないようなものを選んで編まれたものだが、一九一〇年七月、発行と同時に発禁となつた彼最後の発禁著作集である。

この「病中放浪」は、一九〇六年七月から一九〇九年十一月までに書いた文章のうち危険のないようなものを選んで編まれたものだが、一九一〇年七月、発行と同時に発禁となつた彼最後の発禁著作集である。

有り難く、うれしい復刻本です。(三五〇)
〇円で文学館売店で発売中。閲覧室でも
お読みいただけます。)

から文章を抜粋し、当時や現在の写真を
折りませながら、高知市内や佐川、春野
といった高知市周辺を縦一・五メートル、
横四・五メートルの大パネルを作成しご
紹介しました。最終的には右記の内容で
企画展の幕は上りました。

ところで、宮尾展のあり方としては、
さまざまな手法が考えられます。

先年、東京の銀座と仙台で『クレオパ
トラ』の原画と宮尾先生の生原稿の一部
などを展示した「クレオパトラ」展が開
催され、大変好評を博していました。

今回、展示している愛蔵品のほとんど
は『きものがたり』というエッセイ集の
なかで紹介されています。この中で紹介
されている着物は約百五十枚。たとえ

ば、宮尾先生の歴史が刻まれている、こ
の著書を題材として展示するとどうで
しょう。「クレオパトラ」展や「きものが
たり」展などは、視覚に訴えながらも、
ひと味違った、楽しい企画展が開催出来
ることは、間違いないでしょう。また、
時間をかけて作品とじっくり向かい合
い、書斎などをも復元するおおがかりな
生涯展の意味合いももつ、展示もこれま
た魅力ある展覧会でしょう。

そんな中、今回の「宮尾登美子」展
は、『二絃の琴』にこだわり『二絃の琴』
を中心紐解き展示しました。高知を起
点とし、高知を舞台とした内容のもの
を、高知から全国に向けて発信する。大
変烏滸がましい言い方ですが、そんな心

構えで取り組んだ企画展でした。ただ、もう少し時間があれば、もっと内容の充実した展示が出来たのではと、反省の極みです。

しかし、今回の企画展がきっかけとなり「宮尾本 平家物語」が完結するころには、また本格的な企画展も考えなくては……ね」と先生の胸中を語ってくださり、励まされました。

自伝もの、芸道もの、歴史ものと次々と新境地を開拓し、ますます、幅広く活躍を続ける宮尾登美子先生。今回の企画展を通して、多くのみなさんが宮尾文学にふれてくださり、文学に興味をもつていただけたとしたら幸いです。

最後に、宮尾登美子展開催にあたり、

ご承諾、ご協力くださいました宮尾登美子先生、記念講演会でご講演くださいました作家の杉本苑子先生「宮尾文学のふるさと」の大型パネルの原案をご提示くださいました金沢大学名誉教授で理学博士の阪上正信先生、ご家族で館を訪れてくださいました大畠慎浩先生。貴重な原画を快くお貸しくださいました、「クレオパトラ」の谷川泰宏先生……。多くの皆様との出会いの中、皆様方にささえていただき、今回の企画展の幕を降ろすことが出来ました。

今回の企画展は、人が人を呼び、人々のつながりによって完成した企画展でした。

みなさまに心より御礼申し上げます。

県内同人誌紹介



二
八

この極めて小さな場から、大崎は詩集七冊を世に問う、内三冊に県内では椋庵文学賞を、全国賞では壱田繁治賞と小熊秀雄賞の重賞、富田碎花賞を受賞した。西岡も詩集八冊、探訪・紀行集三冊、四詩集に、県出版文化賞と、小熊秀雄賞、日本農民文学賞、富田碎花賞を受けた。

ただただこの一冊を、の念で設けて来た「二人」という小天地。おぼつかない資力と体力と脳力? が尽きるまでは持続したい、と編集人は思い決めている。

(学芸員 津田加須子)

田岡嶺雲

『數奇傳』
さつきでん

某生に與ふ

一郷のために竭すも、一國のために竭す
も、將た天下のために竭すも、若し其志人
間に竭すことを離れずんば、何の大小優劣
かあらんや。

但つねに正義と、眞理と、自由とのため
に奮勵するを忘る、莫れ。

一見骨太のように見えるが、自虐的とも
いえるほど自己剥抉に執した性格のゆえに
か、他の社会主義者のように、外部に戦闘
的に立ち向かうことはなかった。余りにも
繊細すぎたのである。詩人の感性を全開、
「芸術的社會主義者」であることによつて
逆に、その存在を際立たせた、まれな人物
であった。友人、秋水のような悲劇的英雄
の位置から少しばかり遠くにいて、独自の
光りを放っていたのである。アンチ・ヒー
ロー的なロマン主義的個人主義とでも云え
そうな彼の、流転の生涯を辿つてみると、
一種獨得の悲哀のメロディーが流れてくる
のである。

死の前年（一九一二）から綴り始めた自
伝（中央公論連載）が「數奇傳」である。

たいがいの自伝は、書くことを自明の理
としてスタートする。が、嶺雲は自らを凡
人と呼び、凡人が自伝を公表することの意
味を問うことからスタートしている。それ
がそのまま、一種の「自伝執筆論」となり、
序言から本文の冒頭まで、長々と続く。

「吾等の自ら経験した心理状態を自ら反省
し自ら解剖した者も、また心理学者の参考考
は男子解放也」

●嶺雲も見た鏡川遠望

『數奇傳』をめぐつて

評論集『壺中觀』『霹靂鞭』等、従軍ルボ
ルタージュ『俠文章』記録『下獄記』、伝記
『明治叛臣傳』など、時の政府に忌まれつ
つも次々と反骨的文章を発表した田岡嶺雲
(一八七〇～一九一二・高知市赤石町)は、
土佐人には珍しい詩人肌の評論家、文学者
であった。

一見骨太のように見えるが、自虐的とも
いえるほど自己剥抉に執した性格のゆえに
か、他の社会主義者のように、外部に戦闘
的に立ち向かうことはなかった。余りにも
繊細すぎたのである。詩人の感性を全開、
「芸術的社會主義者」であることによつて
逆に、その存在を際立たせた、まれな人物
であった。友人、秋水のような悲劇的英雄
の位置から少しばかり遠くにいて、独自の
光りを放っていたのである。アンチ・ヒー
ロー的なロマン主義的個人主義とでも云え
そうな彼の、流転の生涯を辿つてみると、
一種獨得の悲哀のメロディーが流れてくる
のである。

死の前年（一九一二）から綴り始めた自
伝（中央公論連載）が「數奇傳」である。

といふのは、嶺雲の、その生のような、逡巡の深みから生
まれたともいえるこの含蓄の自伝は、兆民
の「一年有半」とともに、土佐の二大「生
前の遺稿」となった。

（国則三雄志）

見どころ●●田岡山（田岡家の墓）

●赤石町の生誕地碑

木村会館前庭の碑（女子解放放

資料受贈報告
平成十二年六月（八月）
敬称略

6

吉永小糸・泰山集

仁・義・禮・

智・信

五冊

ほか……泰山集

は、江戸前期土佐藩の著名な儒学者

である谷秦山の執筆活動を総合的に

分類・集大成したものです。泰山自

ら集録したものに死後子の垣守が遺

文を補い享保三（一七二八）年に完

成されたもので、49巻23冊から成つ

ています。これが明治四年、子孫

吾等凡夫小人物の自伝もまた全く利潤を災

するに過ぎぬ者でもあるまい（略）

執筆に当たつて浮き足立つていないとこ
ろが、なんとも「嶺雲的」なのである。そうして、「偽るを要せざる範圍に於て其の偽
らざる自己を語らんと欲」して書いた本文

は、母の膝の上に抱かれた仄暗い記憶から

始まり、四十年後の、脊髄病のつびきなら
ぬ進行に死の影をみた描写で終わっている。「吾が一日は如何に苦痛に刻まれたる
者なるべき。吾れば天に謝す、境遇に憤る
るの性を人に与へられたることを」嶺雲を襲つた数々の生の改變劇の、中で
も、（月見草のような）と表現した運命的な
女との離別のシーンは、人と人との別れの
切なさを描いて、比類がない。

「断乎たる社会主義者」たり得なかつた嶺

雲の、その生のような、逡巡の深みから生
まれたともいえるこの含蓄の自伝は、兆民
の「一年有半」とともに、土佐の二大「生
前の遺稿」となった。

（国則三雄志）



▼井上孝夫・俳句三代集 9巻

別巻1 改造社 ほか……「俳句三代集」は明治・大正・昭和三代に亘る俳句の集大成として改造社によつて企画され、公募・審査のうえ物故者的作品を含む三万二千六百余句を収録する句集として、昭和十四年から十五年にかけて刊行されました。

高濱虚子を顧問とし畠田蛇笏・松根東洋城・水原秋櫻子ら十名が審査にあたっています。

▼妻鳥季男・「中国詩人選集16巻、別巻1・総索引1 中国詩人選集二」

集15巻

岩波書店

◆◆◆文学館日誌 2000年6月～8月◆◆◆

Hレハル登雲



「宮尾登美子」展記念講演会
講師・杉本苑子氏(6/11)



「金子みすゞの世界展」オープニング式典(7/8)

6月

- ◆6日 初夏企画展「宮尾登美子展」「一絃の琴」…そして「櫂」「香燈」「朱夏」映像化された作品群開幕。◆11日 「宮尾登美子展」記念講演会開催。文学館ホールにて。第一部「宮尾さんとわたし」。講師・杉本苑子氏(小説家)。第二部「自伝的連作のあとをたずねて」。講師・阪上正信氏(金沢大学名誉教授、理学博士)。参加者約150名。
- ◆18日 「宮尾登美子展」関連行事・「櫂」上映会。文学館ホールにて。1回目約60名。2回目約60名の参加。◆25日 第7回朗読の会開催。文学館ホールにて。須崎朗読研究会の皆様による朗説。○宮尾登美子作品からエッセイ集「花の着物」より「紫陽花」「一絃の琴」他

7月

- ◆1日 スタンブラー開始。/文学専門講座「田岡嶺雲『数奇伝』を読む」開催。
- ◆2日 「宮尾登美子展」閉幕。(期間中入館者は約2700名) / 夏季特別展「金子みすゞの世界展」プレ企画「金子みすゞ作品朗読会」開催。文学館ホールにて。参加者約120名。高知朗読奉仕者友の会の松田光代さん、長江貴世さん、原美知子さん。
- 澤本恵子さんによる、金子みすゞ作品朗読と、芝村和天さんの独唱、澤田真苗さんに歌になつた金子みすゞ。/ NHK高松文化センターへ行ほか来館。◆6日 朝日新聞社・山岸氏、JULIA出版局・風間氏来館。「金子みすゞの世界展」搬入。
- ◆7

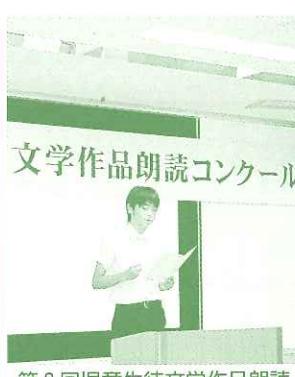
日 児童文學者・矢崎節夫氏、朝日新聞社立川氏、JULIA出版局・大村氏、金子みすゞ顕彰会・鷲田氏ほか来館。◆8日 夏季特別展「金子みすゞの世界展」開幕(主催:高知県立文学館、朝日新聞社)。第1会場は文学館1階ホール、第2会場は2階企画展示室。あわせてオープニング式典開催。

8月

- ◆10日 まんが甲子園出場者一行ほか来館。◆18日 第3回児童生徒朗読コンクール第一次審査(大方会場)、大方あかつき館にて。23校52名が参加。◆20日 「金子みすゞの世界展」閉幕。期間中入館者は約4800名。◆21日 第3回児童生徒朗読コンクール第一次審査(安芸会場)。安芸市中央公民館にて。3校6名が参加。◆第3回児童生徒朗読コンクール第一次審査(高知会場)。文学館1階ホールにて。40校84名が参加。◆25日 「片木太郎の風景展」開幕(主催:ROの会、高知県立文学館)。



詩と童謡コンサート「金子みすゞのゆうべ」



第3回児童生徒文学作品朗読コンクール(地区予選)

大雨による漏水のため、9月1日(金)より8日(金)まで臨時休館。9日(土)より片木展再開。13日(水)より全館開館。

2日の高知新聞朝刊の読者投稿欄にコメントの感想も掲載される。

た皆様に心からのお礼を申し上げます。

9月

- ◆高橋康之・「(詩集)瀧 岡本彌太郎原稿社 一九三二年 (詩集)夜道 瀧川富士夫 聖草詩社 一九三三年」ほか……「瀧」は岡本彌太郎の生前に刊行された唯一の詩集、「夜道」の瀧川富士夫は彌太の愛弟子。寄贈資料の中には他に彌太と瀧川富士夫の二人が編集発行した「土佐詩人選集 聖草詩社 一九三三年」もあります。
- ▼中田光繁・「正法眼藏全講」18巻
岸澤惟安 大法輪閣
- ▼戸田敏夫・「(遺句集)風花 戸田敏夫編刊」
- ▼高橋蛙・以登・「いしづみの風」
土佐の句碑を尋ねて—— 高橋蛙・以登共著刊
- ▼滝本玲子・「(歌集)トネリコの花」
高知歌人社・「(歌集)花のいのち 高知歌人叢書72 龜井美和子」
- ▼夏爐発行所・「高橋柿花俳句集成」
夏爐俳句会他編 夏爐発行所
- ▼山本晶子・「(歌集)新緑 山本晶子」
山本晶子・「(歌集)青き流れ 小谷貞広」
- ▼吉井滋・「吉井勇(歌碑)拓本」あめつちの大きこころにしたしむと駿河の山の湯ところに来し」
このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いたしました。厚くお礼を申し上げました。厚くお礼を申し上げます。

高知県立文学館カレンダー

2000年
10~12月

	10月—October	11月—November	12月—December
募集のご案内	<p>[第3回文学カレッジ] <申し込み方法>所定の受講申込書にご記入の上、文学館まで郵送、持参またはFAX。 ※くわしくはお問い合わせください。 <日時>以下の13時30分~15時（敬称略）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●第1回／10月14日「山内容堂の漢詩」 講師…竹本義明（土佐女子中学・高等学校教諭） ●第2回／11月25日「土佐の反骨 田岡嶺雲」 講師…別役佳代（当館学芸課長） ●第3回／12月9日「植木枝盛と詩歌・俗謡」 講師…外崎光広（県立高知短期大学名誉教授、松山大学元教授） 	<p>[第三回児童生徒文学作品朗読コンクール] ■最終審査（地区審査で選出された児童生徒の公開審査及び表彰式、記念講演会）本年度は142名のうち、23名が最終審査（本選）にのぞみます。 11月5日（日）午後1時から、※一般公開。 記念講演会「本のよみ方、味わい方」 講師／亀村五郎氏（日本児童文学者協会会員）</p>	<p>[第4回／1月13日「上林暁と田中英光～土佐の私小説～」] 講師…山川禎彦（高知文学学校運営委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●第5回／2月10日「土佐の方言詩について」 講師…小松弘愛（詩人） ●第6回／3月10日「寺田寅彦の歐州日記を旅する」 講師…永国淳哉（学校法人日米学院・須崎ビジネス専門学校長）
催しもの	<p>■第10回文学館朗読の会 ~朗読の会発足1周年記念企画～ 「六人の土佐の詩人たち 一横村浩、岡本弥太、島崎曙海、片山敏彦、大江満雄、上田秋夫」 10月21日（土）14時から <朗読>岡村洋子、片岡ふみ子、野中久美子、松田光代</p>	<p>■関連催しもの</p> <p>国際シンポジウム 「田岡嶺雲と現代」 [日本社会文学会 地球交流局と共に] 日時 11月11日①14時～会場 文学館ホール</p> <p>パネリストに西田勝氏（文芸評論家）、ロナルド・P・ロフタス氏（アメリカ・ウイラメット大教授）、キム・レイホ氏（ロシア科学アカデミー、世界文学研究所教授）、岸陽子氏（早稲田大学教授）、司会に、高橋正氏（徳島文理大学教授）を予定</p> <p>■参加ご希望の方は、郵便番号、住所、氏名、電話番号を記入の上、11月6日までに往復ハガキでお申し込みください。 定員100名。先着順。</p> <p><文学散歩> 3ページをごらん下さい。 いずれの催しも参加費無料。</p>	

2000年秋季企画展

「土佐の反骨 田岡嶺雲展」 10月21日（土）～12月3日（日）

1870年、現・高知市赤石町に生まれた反骨の思想家、自伝文学の傑作『数奇伝』の著者、田岡嶺雲（たおか・れいうん）の生誕130年を記念し、企画展示。



【休館日】10月——2, 10, 16, 23, 30日 11月——6, 13, 20, 27日 12月——4, 11, 18, 25日～1月1日

次回特別展予告 アルプスの少女ハイジ 写真展

永遠の名作として世界的に親しまれているヨハンナ・シュピーリ「アルプスの少女ハイジ」自然の素晴らしさと少女の純真無垢な心を描いて、洋の東西を問わず感動を与え続ける、この作品の舞台を世田谷文学館のご協力をいただき「アルプスの少女ハイジ」（求龍堂グラフィックス）収録の西森聰さんの写真でご案内いたします。

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時30分まで）
 休館日 毎週月曜日（休日・祝日の場合はその翌日）
 年末年始（12月26日～1月1日）
 観覧料 一般350円
 特別企画展のあるときは、料金が変わります。（一般550円）
 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県（市）長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
 駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
 電話 088-822-0231
 FAX 088-871-7857
 e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
<http://www2.net-kochi.gr.jp/~kentbunka/bungaku/>
 〒780-0850